
刻む音

陽向

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刻む音

【Nコード】

N3274V

【作者名】

陽向

【あらすじ】

『消えたって、そう願ったんです。死にたい、と———』

時は現代。フランスに住む私——暦は、日本人とフランス人クウォーターのため他の人たちとは少し外見が違った。闇のような黒い髪に、ビー玉のような緑色の目。似合わないちぐはぐな外見で、少しいじめられるから、他の人は苦手……なんです。でも、もういいや。

もう誰も信じられない。そんなことを思っていた、ある雨の日。立

ち寄った白い教会で、天使のような少年リトと出会いました。

プロローグ

暦の心の中を、ある言葉が反芻する。

『あんたなんか消えればいいのよ』

嗚呼、やっぱり私は要らない人間なのよ。

滝のように降る雨が煩わしい。髪が濡れ顔に張り付く。『長い方が似合う』と祖母に言われてからずっと伸ばし続けている黒髪は、雨のせいでずっしりと重い。まるで暦の心情のように。

いっそ死んだ方が楽？ そんなことまで考えてしまう。

じゃあもう……

「どこかに消えてしまいたい……」

暦の呟きと同時に、目の前に教会が見えた。

1、庭場の裏の、白き教会

「ここ、は……？」

暦も初めて来る場所だった。このあまり広くない街のことなら、何でも知っていると思っていたのに。

「おい、そのの」

暦はビクツと驚く。この豪雨の中、誰もいないと思っていた教会の裏庭に、一人の少年が立っていたのだから。

「なんでそんな驚くんだよ。つか何それ、死ぬ気？」

少年の視線は暦の手に向けられた。彼女が握っていたのは、一番手頃だったのだろう、カッター。そんなもので死ねる訳もないとさすがに暦でも分かっているが、それでも彼女は自傷していた。

「あ、いえ……こんな神聖な、教会では死にません。私のせいで、ここが汚れてしまいますから」

カッターをかばんにしまう。しかし少年はそういうことを言ってるんじゃないという風に言った。

「……バツカじゃねえの？結局死ぬ勇氣なんてない癖に、そんなもんまで持ち出して意味ねー」

少年はずかずかと暦に近寄る。暦は逃げようにも足が固まったように動かないかった。否、逃げる気など毛頭起こらなかったのだ。理由はわからないが。

「お前、名前は？」

いつの間にか座り込んでいた暦に視線を合わす。よく見ると端正な顔立ちだった。大きな碧い瞳に、白い肌、そして白に近い金色の髪。聖書に出てくる天使様に似ている、と思った。彼女はキリスト教徒だった。

「こ、暦」

「コヨミ、だな？」

こくつ、と頷くと、彼はふわりと笑って自らも名乗った。

「僕の名前はリト。この教会に住んでんだ。この雨だし、本堂で雨宿りしてけよ」

その口調と不釣り合いな一人称に思わず頬が緩む。笑ったのは何年振りだろう。リトの笑顔を見た瞬間、暦の心は少しだけ軽くなったようだった。

リトは暦を起こし、本堂へと案内した。

「僕以外いない誰もから、若干掃除行き届いてねえところあるけど、まあ許せ」

本堂はリトが言うほど汚くはなかった。むしろ、毎日掃除をしているかのようにきれいだった。

「で、なんで刃物なんか持ってたんだよ。何するつもりだったんだ？」

リトは本堂にある椅子に腰を掛ける。暦も進められたが、やんわりと断る。自分なんて座っては行かない気がした。リトはあきれた表情で暦にタオルを渡す。いつどこから、出てきたのだろうか。

「……」

暦は沈黙を守る。少し軽くなっていた心が、次第に重くなっていく。

「……言いたくねえんらしいけど、気になるだろ？」

リトが思うのも分かる。目の前のいきなり現れた女が、カッターなんか持っていたら誰でも驚くだろう。

「……この、世界から」

ぽつぽつと、彼女は話し始めた。

「うん」

「消えたいってそう、願ったんです。死にたい、と。そしたら目の前にこの教会が……」

最後は消え入りそうな声だった。した向きがちに目を伏せ、指を絡ませ目の高さに持ち上げる。まるで許しでも請うように。

「現実がそんなに嫌なのか？」

リトはじろりと暦を見る。暦はうつむいたままはいと答えた。

「……弱い自分が嫌いで、こうやって弱音を吐いて泣くことしか許されない自分が嫌で、だから逃げて」

「そうか、じゃあしばらく、この教会で過ごす？」

暦が言ったことをまるで無視したかのようなりトの言葉に、暦はハッとして顔を上げた。なぜ、全く関係ない話を、今……？

「んな驚くなつて。聞いた感じお前、かなり悩んでそうだし、ほつといたら本気でそのうち死にそうだし。逃げたいなら、ここに気が済むまでいればいい」

確かにあそこにはもう戻りたくなかった。自分を見る冷たい目、陰口。それらすべてが苦痛でたまらなかった。しかし、今日初めて会った人間を信用していいのだろうか。しかも、自分と年の近そうな”男”の誘いに。

「警戒……はさすがにするよな。僕も一応男だし。別に手を出す気なんて全くないから、とりあえず今日ぐらい泊まってけば？ 雷鳴るよ、これ」

ふと顔を上げ窓を見ると、瞬間雷が鳴りまばゆい光が見えた。雨は先ほどより激しくなっている。帰るのは難しそうだ。

「じゃあ、今日ぐらいは……どうせ両親は、心配しないですから」
一日くらい連絡しなかったところで、両親は気にもかけないだろう……というより、居ないことに気づかない、と言う方が確かだろうか。

「この雨の中、女を一人で返すなんて元よりできなさそうだしちようどよかったよ。じゃあちよつとこっち来て」

リトは本堂の中にある、扉を開けた。

2、向こう側

扉の向こうには、少し狭い廊下があった。いくつかあった部屋に続くと思しき扉のうち、リトは奥から二番目の扉を引いて暦を手招いた。

「ここ、使っているよ」

そこにはかわいらしいこじんまりとした部屋が広がっていた。しばらく誰も足を踏み入れていなかっただろうと予測できるくらい整頓されたこの部屋には、本堂と同じく埃一つ落ちていなかった。

「ちよっと前まで他のやつが使ってたんだけど、そいつ出て行ってから誰も使っていないんだよなー。あ、一応ここはきれいに掃除してあるから問題ねえよ」

ちよっと前まで、というのが少し引かかったが、それ以上に暦はあてがわれた部屋に魅入っていた。

それほどまでに、自分の好みだったのだ。

木でできたベッドに、カントリー風な机。床には薄いピンク色の絨毯が敷いてあり、その上にはちゃぶ台のような小さな机があった。もろに自分の好みだった。

「こんな部屋……いいんですか？」

「あ？別にいいって。僕以外に住んでないって言っただろ？部屋有り余ってたんだよ。てかそんな気に入ったのか？」

少し異常なほど部屋を見入る暦に、不思議そうな目を向ける。暦はハツとして、リトに視線を戻す。

「はい、すごく私好みなので……」

暦はバツが悪そうに言う。彼女は気に入ったことや興味を持ったものが目の前にあると、つい熱中してしまう癖があった。

「気に入ってくれたんならいいんだけど……つかさ、さっきから僕日本語で話してるんだけど、あんた日本人だよな？」

そういえば、リトは暦に会った瞬間からずっと日本語で話をしてい

た。聞きなれた言語なので気にも留めていなかったが、今思えばこはフランス。金髪碧眼の少年が流暢な日本語を話しているなど、珍しいこと極まりないのだ。

「一応クウォーターです。日本人と、フランス人の……」

「通りで黒髪に緑の目なわけね。ちょっと不思議だってさ。現地住み？　だったらフランス語の方が「日本語が良いです!!」

今までリトと話していた中で、暦は最も大きい声を出した――――
――否、出してしまった。

「あ、すみません……ただ今はフランス語、聴きたくなくて……」
嫌でも自分の悪口を言っていた人たちを思い出すから……なんて、初対面のリトに言えるはずもなく、暦はただそれだけを述べた。どうしても今は、祖母が話す言語を聞いていたかった。なんだか落ち着くから……

「……分かった。じゃあしばらくは日本語で話しくよ。日本語よくわかんねえから、変になんの嫌なんだけどなあ」

リトは渋々、といったような言葉だったが、口調はさしてイヤそうではなかった。むしろ、少し嬉しそうな表情をしていた。

「僕はそこの突き当りの部屋だから、何かあったら来いよ。ちなみに手洗い場は廊下出て左から二番目、飯とか食うのはその右隣、あと風呂場は……手洗い場の真正面のとこ。他何かあったら行っ来いよ?」

他にも色々とりトは暦に言い、暦がすべてを覚えきれぬままリトは部屋を出て行ってしまった。

3、不安

学校帰りに寄っただけのようなもので、暦は教科書など以外特に何か荷物を持っていることもなかったので、やることもなく一人でただ机の前に座っていた。

（何もやること、ないなあ……）

せっかく案内してくれた部屋も、自分がいるとなんだか不釣り合いな気がして落ち着かない。“異端”と蔑まれてきた自分には、どうしても似合わない。

「ちよっと他のところとか、のぞいてみてもいいかな？」

その問いには誰も答えることもなく、暦は一人立ち上がりドアノブに手をかける。が、しかし。

「うわっ!!」「ひゃっ!？」

ちようどリトがドアを引いたところだったようだ。片手に何かを持ち、ドアノブを握ったまま固まっている。

「びっくりした……どこ行こうとしてたんだ？トイレか？」

「あ、いえ……暇だったので、ちよっと周りを見てみようと思って」
どうやら着替える用意を持ってきたらしかった。そういえばさっき濡れたまま、まだ着替えてもいない。とはいえ、着替える服を持っていないのでこのままにいるほかはなかったのだが。

「あー、確かに暇だよな。まあ一応、着替え持ってきたから。濡れたままじゃ気持ち悪いだろうし、風呂でも入って着替えろよ」

リトは無造作に持っていたものを置いて、出て行こうとしたが何を思ったのか暦の方を向いてこう言った。

「あんた、料理できる？」

「へ？」

唐突な問いに少し戸惑う。出来ないわけではない、両親は共働きでよく自分の分は作っているから。

「出来なきゃいいんだけど、何が好きか分かんねえし手伝ってくれ

たら嬉しいなーって。どうせ暇だろうし、暇つぶしにでも」

「す、少しならできます。邪魔にはならないかと……」

何から何までしてもらった分、少しでもお返しをしようと思った暦は、その答えを述べた。するとリトは天使のような笑顔を浮かべはにかんだ。

「じゃあ風呂から上がったらキッチン来いよ!!」

今度こそリトは部屋を出て行き、暦はリトの持ってきてくれた着替えを持って風呂場に向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3274v/>

刻む音

2011年10月9日13時00分発行